
機械仕掛けの情景は壊れない

殻匣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機械仕掛けの情景は壊れない

【Nコード】

N7089F

【作者名】

殻匣

【あらすじ】

昭和39年。急激に電子工学の技術が発達し、世に精巧な人型の機械が普及するようになる。彼らは通常の機械とは違い、インストールされたプログラムによって本物の人間と同じように感情を持ち、思慮しながら行動する。そして更に故人の記憶を継承出来るというプログラムまでが広まり始めて……。脆いながらも強く生きようとする人間達と人と同じ感情、或いは死者の記憶を持って生まれてきた機械。二つの存在が出会った時、物語の歯車と人間の心が持つ奇跡が加速する。

****の回想

いつ頃からだったろうか。

もう歳月を数える事すら億劫になっていた。

自分の中でゆるやかに進んでいたはずの時間は過ぎ去っていき、
気がついた時には、自らを取り囲んでいたはずの全ての物が手元を
離れていった。

全てを破棄し自堕落な生涯を送り、外部との繋がりも断ち続けて幾
年がたち、現在。

その気が遠くなる位の月日の間、自分の心はずっと暗闇の中にあっ
た。

この己自身が生み出した深い闇の淵で足掻けども抜け出せずにいる。
今もそれは変わらず。

何故こんなに墮落した道を歩むようになったのかはよく覚えてない。
その以前は少なくとも今の様な有様では無かっただろう。
普通に働き、普通に家庭を持ち、普通に年老いていく。

こんな自分にもかつて暖かな光に包まれた日々が確かにあったと
いうのに。

誰もが持つているであろう、ありふれた思い出というものが。

それが今は無い。

ある日を境に突然、目の前から姿を消してしまったのだ。

私の世界から希望の色が消失した。

それは腕をすり抜けてそのまま遠くなる。

思い出という名の形は変容していき、時間が経つにつれ頭の中で段々と朧になってゆく。

そしてやがてもう原型が崩れて二度と戻らなくなるのだろう。

思い出という物はいくら忘れたいと望んだとしても、いつかは元の形を忘れてしまう。

人は過去に縛られた俤では生きてはいけないのだから。

しかし、その事実すら堪え切れぬ事だった私はそれすら拒んでしまった。

だから結局、今になるまで遠い過去という檻の中に囚われたままだ。

私の支柱にあった大切な何かが抜け落ちてしまった。

己の精神を保つための大事な部分のネジがゆっくりと緩んでゆき、ひとつずつ落ちていく感覚。

そしてそれらが全部が抜け落ちた瞬間、自分の内部が均衡を失くしていくのが解った。

ゆるやかに、ゆるやかに崩れ落ちてゆき、やがて……
それから何もかもがどうでもよくなった。

今まで愛し続けた世界も自分の精神を苛むだけの物のように思えた。

その後の私の生き方はよくは覚えていない、だが今思い出しても酷いものだったように思う。

しかしそれすらも、今となってはもうどうでもいい事ではある。

私が今、やっている事が人間としての道理を踏み外しているとしてもこの生きながらの地獄ももうすぐ終わる。

待ち望み続けた願いを叶える時が来たのだ。
そして、それを果たす希望は今、この手の中にある……。

長期間、物が乱雑したまま放置されていた部屋はもう夜だというのに
明かりすら点いておらず、部屋には真つ暗な夜の暗闇が腰を携えて
いた。

その上、狭い室内は閉め切っていた所為か空気が異常に淀んでいる。
私は今になるまで気にも留めなかったらしい。

なんとなく口が寂しくなってきた煙草を一本銜えてライターで火を
灯す。

啞内に広がる独特の脂臭さと荒んだ煙の味。
肺に貯めるように吸って、吐き出す。

漆黒の空気中で白い煙の魚が泳ぐようにゆらめいた。
霞がかった向こう側で人影がぼんやりと浮かぶ。
まだ年端もいかないほどの子供が椅子に座っている。

私が造った『彼』であつた。

『彼』の小柄な体は脆いパイプ椅子の上で横たえるようにして座ら
されている。

暗闇の中へだらりと投げ出されている手足。
その肌は白い。しかしそれは酷く冷たそうな色をしていて鈍く
光っている。

眠るように柔らかく伏せられた瞼。
閉ざされた唇はもう言葉を語る事など有り得ないのかもしれぬ。

それでもいい。

微動だにしない。当然だった。『彼』はこの段階ではまだ鉄の人形なのだから。

例えば外見を人間そのものの形に近付けようとも、魂は宿らない。

これが自分を数年間苦しめてきた今までの課題だった。

いかなるプログラムを駆使したとしても人の心だけは模造する事はできない。

心だけは人の手では造れない。

私が『彼』を作り始めてからどのくらいの月日を消費したのかわからない。

三年か、いや四年、もしくはそれ以上……とにかく長い事には変わらない。

容貌も変わっているのだろうか。きっと、今の自分は昔とかけ離れた顔に成り果てているに違いない。

もし学生時代に仲が良かった旧友達がこの姿を見せたなら、彼らは驚くだろうか。

きっと何があつたんだ、とか聞かれるに違いない。

そういえば長らくその旧友達とも顔を合わせていない。

一体、どうしているのだろうか。今となつては知る手立ては無い。

せめて一回ぐらい、以前に所在を調べるなりしてでも顔を出すべきだったろうか。

それも今更考えた所で遅いが。

思わず苦笑しながら油分が抜けた掌を頬に宛がえば、瘦けた肉の中にも深い皺が刻まれているのが分かった。

年月の分だけ増えるその溝を指の先で辿る。

骨が浮き出ており、それを包む皮膚は枯れ木の表面の如くざらざらに渴いている。

きつとこの身体は長く持たない。
これは直感だった。

時の流れには逆らえぬ。もうじきこの体は朽ちるだろう。
ひよっとしたら、明日にでもくたばってしまうかもしれない。
それでも私がやる事は一つしかない。

無謀な行いだつたとしても、引けない。

後戻りなど今更、死んでも出来ぬ。

むしろ自分の全てを、残りの僅かな生涯を賭けても成さねばならない。

もつと時間が欲しい。一秒ですら惜しい。足りない。まだ足りないのだ。

私の刻む時はもう長くない。あと少しだけでいい。どうか。

「この命が完成するまで」

見えない何かに心の中で縋りつきながらもパソコンのキーボードを叩く手を止めない。

今まで貯めていた全てのデータを記号化した文字の羅列が画面を埋め尽くしている。

液晶画面で漂う電子の海。

それはこれから命を造るための大事な源だ。

一人分の人間の意識を復元させる事が可能なほどの情報の集合体。

私は一人の意志を持った人間を人為的に生み出そうとしている。（

我ながらなんて馬鹿馬鹿しい行為だ！）

気でもふれていると罵られても仕方が無い。

だって私の頭の螺子はどうの昔に外れているのだから。
それこそどうでもいい事だ。

『彼』を完成させるか否か。今はそれだけだ。

その他はどうにでもなればいい。

周囲が今頃になって何か言ってこようと、最早関係など無いに等しい。

こうなってしまうえもう、どうでもいいのだ。

暗い部屋でパソコンの液晶画面のみが青い光を放っている。

もう少しすれば夜が明けるかもしれない。

夜の闇が白くぼやけて、視界が明るくなってきていた。

朝日を見る気分にもなれなくて作業に没頭する。

私は正体がまるで掴めない自分の中で燻ぶる疑問の解答を求めるかのように

これからまた繰り返す一日にどう身を削るかを考えながらパソコンのキーを叩いた。

ほんの少しでも自分の未来に希望の色が混ざる事を願いながら。

****の回想（後書き）

初心者なのでまだまだ至らないところがありますが、よろしく願
いします！

とりあえず精進あるのみ・・・。

夢

見知らぬ公園。

「ここはどこだろう」

ふと呟く。

答えは無い。

赤褐色の鎖がたてた寂しげな音だけ。

何故か酷く沈んだ気分になる。

何か大事な事を忘れているような気がした。

目の前を白くて小さい物が横切る。

それは優しげな色をした花弁だった。思わず空を仰ぐ。

息が詰まる程に美しく埋め尽くされた薄桃色。

その合間から覗く蒼茫とした空の切れ端。

ああ、春だ。

そんな言葉が思わず口から零れていた時。

「おい、原沢」

どこからか誰かが自分の名を呼ぶ声が聞こえる。

誰だ。

振り返る。

そこには誰もいない。ただ桜色が連なっている景色だけだ。しかし確かに声は聞こえる。自分の名前を呼びながら。

「原沢」

また聞こえた。

遠い場所から呼んでいる。
立ち上がり辺りを見回す。
見えぬ姿を追う。

そして気付く。

並木の向こうで手を振りながら駆け寄ってくる自分と同じ学生服の少年に。
子供らしい無邪気な笑い声と足取りで近づいてくる。
連なる桜色に埋もれて霞んでいる。

呼ぶ声が近くなる程、急激に周囲の視界が鮮明になってゆく。

「あれ？」

ふと急に違和感を感じて辺りを見渡す。
そしてもうひとつ或る事に気付く。

ここは昔、学生だった自分が帰り道に通っていた公園ではないか。
春にはここの公園の桜が一際綺麗に咲く。その季節が訪れるのがと
ても待ち遠しかった、
あの公園ではないのか。

友人達ともこの桜を見ながら帰っていた。

友人？

そうだ、長い事忘れていた。
何故忘れていたんだろう。
あんなに大切だったというのに。

「よお、久し振り」

この声は昔の友の声だ。

懐かしく、何者にも代えられない友の声。
忘れていた声。明るさに満ちた声。もう出会う事はないと思ってい
たはずの声。

そして。

「・・・・・・・・由野宮・・・・・・・・」

友と向き合った僕は齒の根が合わない声で友の名を呼んだ。

「・・・・また会えたな、嬉しいよ原沢」

そう言ったかつての旧友の顔は干からびて骨が浮き出し、瞳孔は暗
い空洞になっていた。
希望に溢れていた過去の面影を完全に失った死者の表情。

嗚呼、これは。

昨日、ゴミ捨て場に遺棄されて変わり果てた哀れな旧友の顔だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7089f/>

機械仕掛けの情景は壊れない

2010年10月25日19時30分発行